

狂言(末広かり)を遡る

田口和夫

めでたい脇狂言のうち、「果報者物」と言われる狂言五曲(末広かり・目近・張蛸・三本柱・麻生)は、ことめめでたいと意識されているものだが、その代表と目されているのが(末広かり)である。(三本柱)は時に上演されることがあるが、(麻生)は舞台上で髪を結う場面があるので鬢が必要となり、(目近)(張蛸)はあまり祝言性が感じられないという難点があつて、もっぱら(末広かり)が演じられることになっている。

めでたさと笑いに彩られた人氣曲(末広かり)だが、中世のそれと、近世以降とは台本上の大きな違いが存在している。それを検証してみよう。

天正狂言本と近世諸本

中世の姿を示す天正狂言本の(末ひろがり)を段落に分け、校訂本文を引く。

1 大名出て人を呼び出す。都へ行て、いかにも高ひ末ひろがりを買ふて来よと言ふ。

2 さて上る。都に着きて呼ばわる。

3 たらし一人出て、差し笠を売る。

4 もし主腹立てば、囃子物。御笠山く、人が笠を差すならば、我も笠を差さうよと教ゆる。

5 下る。主これを見て腹を立つる。追つ走らかす。

6 其時、囃子物。主浮かる。諸共に踊る。笛留め。

太郎冠者の買い物失敗譚と囃子物を組み合わせ、わけて成立しており、梗概化してしまえば、近世以降の(末広かり)とおおむね同様の展開をしていると言えるので、相違の方は指摘されても特に問題とされることはなかったのである。以下、狂言各流の最古台本(大蔵流・

虎明本、和泉流・天理本、鷲流・享保保教本)と狂言記を参照しながら、段落を追って中世と近世の違いを確認してみよう。

1 ①大名であること。虎明本と成立がやや

下る享保保教本は「大果報の者」だが、天理本は「在所の者」、狂言記は「大名」である。現行が各流とも「大果報の者」であることからすれば、この揺れは、「大名」が古型である証拠となる。

②条件「いかに高い」。虎明本・享保保教本は良い末広かりの条件として「地紙良う、骨に磨きを当てて、要しつかとして、されえざつとかいた(したトモ)」をここで言う。各流の現行と同じ。天理本はこの条件を本文ではなく表題の下に補記する。初めは言わなかった証拠であろう。狂言記もここでは何も記さず、後の3の段階で「頼うだ人の注文のおこされて」と条件を書いた紙を出すことになっている。天理本も本来はそのような演出であった可能性がある。このような揺れがなぜ生じたのか。現行でも、1・3・5の段階で繰り返される末広がりと傘の共通点、スツパによる言い抜けの面白さが、天正狂言本には用意されておらず、近世に至って新たに導入された要素だったから、その導入の過程で揺れたのだと推測できよう。「高価」という条件からは、大名は果報者的であったことになり、それは近世と共通する要素だが、末広かりの条件の違いは、(末広かり)の中世と近世を分けるポイントだったのである。

- 2 この段落は問題がないだろう。
- 3 ここでは末広がりやの価格だけが問題になった筈である。虎明本・天理本は「百疋」、保教本「二百疋」、狂言記は「万疋」である。「いかにも高い」なら「万疋」が相応しいが、天正狂言本には記されていない。
- 4 ここで問題になるのは囃子物の詞章である。これは後に考える。
- 5、6の段落は問題がない。

狂言の進化と構成

古く、小山弘志氏が現行の〈末広がり〉について、戯曲構成上の問題を指摘されたことがある。(末広がり)の前半1・3の場面、即ち傘を扇だとりなすことによる「知的・遊戯的な笑い」と後半5の主人が浮かれる気分の笑いの場面とは、スッパが囃子物を教えるという「何ら必然性」がない行動によって繋がれているだけであって、「全体として両者が相まって一つのものを表現するという関係を持つていないのは、『末広がり』の構成の弱さを示し、狂言の場面本意の性格を物語るものである」(昭和33年、岩波講座日本文学史「中世の演劇・狂言」というのである。この論を初めて読んだ時はなるほどそういうものかと納得した事であった。近代の狂言研究が軌道に乗り始めた昭和33年には、この結論に納得せ

ざるをえなかったと言いつ換えても良いであろう。現在の研究レベルでは、違う結論を導き出すことができる。天正狂言本に見える〈末広がり〉の古型によれば、現行前半の「傘を扇だとりなすことによる知的・遊戯的な笑い」は存在せず、太郎冠者の買い物の失敗という筋立てと、最後の囃子物に浮かれる笑いの場面によって緊密に構成された狂言だったということになる。近世に入る時に、狂言役者のコトバの技術を生かす新たな場面が創造され挿入された。それによってこの曲は前半にもコトバの笑いを持つことになり、見所の多い曲に進化したのである。小山氏の指摘は、いみじくも狂言の進化の過程における問題点を明らかにしていたと言えよう。

このように、一つの趣向だけを持った小さな狂言に、もう一つの趣向を補うことによって、見栄えのする大きな狂言に進化するという現象は、狂言(千鳥などに明確に見えることである。中世の狂言から近世の狂言へ脱皮する過程に、このような狂言師の工夫があったということを確認しておきたい。

〈末広がり〉の囃子物

虎明本・天理本・保教本とも現行と同じく、「かさを差すなる春日山、これも神の誓ひとて、人がかさを差すならば、我もかさを差さ

うよ、げにもさあり、やようがりもさうよのくく」である。狂言記には小異がある。

「かさを差すなる・」の解釈は、「傘をさすという春日山、傘をさすことも、神の人々を救おうという誓いになうことだから、人が傘をさすなら自分も傘をさそう。本当にさうだよ、「面白いことだよ」(大蔵虎明本狂言集の研究『頭注』)となる。天正狂言本の初句は「御笠山くく」である。春日山と御笠山(御蓋山)は同じ山なので、同じ事を言っているようだが、初句の違いが気になる。「差すなる」は伝聞の表現で、やや他人事のように見えるので、後の「我」が誰なのか、曖昧になっている。それに対して「御笠山くく」は山に呼びかけているように見え、そうすると春日曼茶羅図で御蓋山が春日明神を覆っているように見えるのと重ねて、「我」は春日明神そのものではないかと考えることになる。この囃子物が本来は祈雨行事の「雨悦び」の歌であったらうというのは金井清光氏の説だが、それを援用すれば、春日明神が御蓋山に呼びかけ、人がかさを差すなら、私もおまえを笠にして、人とともに雨を喜ぼうと言っていると解したい。神と人とが芸能の中で共に遊ぶという信仰がそれを裏付けていたと言えよう。

(文教大学名誉教授)